

# 小垣外・辻垣外遺跡

賃店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1995.3

長野県飯田市教育委員会

# **小垣外・辻垣外遺跡**

**貸店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書**

**1995. 3**

**長野県飯田市教育委員会**

## 序

中央自動車道飯田インターチェンジから東にのびる一般国道153号飯田バイパスの建設により、沿線一帯には新しい店舗が建ち並び、周囲の景観は大きく変わろうとしています。

たび重なる開発は、景観だけではなく地中に埋まっている遺跡の姿も大きく変えてしまいます。私たちが住むこの伊那谷には、豊かな自然があり、古代より人々の生活を支えてきました。しかし、自然の存在があたりまえになり、この自然が私たちの生活にどのような影響を与えているかを考えることはあまりないように思われます。古代から連續と続く人間の生活の有様を知ることは、人々がこの伊那谷の自然とどうかかわってきたかを知ることにもなります。そうすることで、私たちの生活を見つめ直すことにもなるのではないかと思います。

全国的には新聞のトップを飾るような大発見もありますが、一つ一つの調査の成果は小さいものであっても、それを積み重ねていくことによってより大きな成果へつながっていきます。

確かに、現代に住む私たちがよりよい生活を送るために、諸開発によって遺跡が破壊されることはやむを得ないといえます。しかし、遺跡のもつ意味を考えますと文化遺産としての埋蔵文化財を何らかの形で後世に残すことでもまた考えなければならない問題といえます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、ご理解とご協力をいただいた信南交通株式会社をはじめとする関連各機関と発掘調査から整理作業までの一連の調査に直接従事していただいた方に心よりの感謝を申し上げ、刊行の言葉といたします。

平成7年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

## 例　　言

1. 本書は貨店舗建設に伴う飯田市北方 埋蔵文化財包蔵地小垣外・辻垣外遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、信南交通株式会社の委託を受けて飯田市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際しては、遺跡名を「小垣外・辻垣外遺跡」とし、遺跡略号であるKGTに、調査区域の中心地番の795を付した。当遺跡は、平成2年度の分布調査実施の際に遺跡の名称・範囲等について見直しがされている。この際に確定した遺跡の範囲に、昭和47年の中央自動車道建設では小垣外・辻垣外遺跡として、昭和60年の一般国道153号飯田バイパス建設では小垣外遺跡として発掘調査されているものが含まれることから、遺構番号については前回の調査に連続する番号を付した。
4. 調査は、平成5年10月12日から11月19日まで現地調査を実施し、引き続き平成6年度中に報告書作成のための整理作業を行った。
5. 本調査区における調査区の設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（1：5000大縮尺地形図（国土基本図）に準ずる。）に基づき設定した。本調査区の区画番号はLC-84-34となる。（区画設定の詳細については1994年飯田市教育委員会発行の『中村中平遺跡』を参照のこと。）なお、調査区設定・航空測量・航空写真撮影は株式会社ジャステックに委託した。
6. 本報告書の記載内容については、遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は、渋谷恵美子が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行った。
8. 本書に掲載した図面類の整理、遺物実測、写真撮影は渋谷があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集は、調査員全体で協議の上、渋谷が行い、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表わしている。
11. 本書に関連する出土遺物及び記録された図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

## 本文目次

序

例言

目次

I 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	1
II 遺跡の環境	6
1. 自然環境	6
2. 歴史環境	7
III 調査結果	11
1. 積穴住居址	11
①31号住居址	
2. 方形周溝墓	11
①方形周溝墓 1	
3. 土坑	14
4. その他の遺構	18
5. 遺構外出土遺物	18
IV まとめ	23

## 挿図目次

挿図 1 小垣外・辻垣外遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図 2 調査地点及び周辺地図	4
挿図 3 基準メッシュ図区画調査位置	5
挿図 4 遺構全体図	9・10
挿図 5 31号住居址位置略図	11
挿図 6 方形周溝墓 1	12
挿図 7 方形周溝墓 1 埋葬施設	13
挿図 8 土坑137～141	15

挿図9 土坑142～146	16
挿図10 土坑147～150	17
挿図11 ピット群(1)	19
挿図12 ピット群(2)	20
挿図13 ピット群(3)	21
挿図14 ピット群(4)	22

## 図 版 目 次

第1図 31号住居址、土坑137・145、遺構外出土遺物	26
------------------------------	----

## 写 真 図 版 目 次

図版1 調査区全景	28
図版2 方形周溝墓1(南から)、同 主体部(東から)	29
図版3 方形周溝墓1主体部東西セクション、同 周溝東西南北各セクション	30
図版4 土坑137、土坑138、土坑139	31
図版5 土坑140、土坑141、同 東西セクション	32
図版6 土坑142、同 南北セクション、土坑143	33
図版7 土坑144、土坑145、土坑146、同 東西セクション	34
図版8 土坑147、土坑148、土坑149、土坑150	35
図版9 31号住居址、土坑137・145、遺構外出土遺物	36
図版10 発掘調査風景、遺構実測、航空写真撮影	37

## 一 経 過

### 1. 調査に至るまでの経過

中央自動車道飯田インターチェンジ周辺は、一般国道153号飯田バイパスの開通により、大型店舗の進出など近年特に開発の進んでいる地域である。

平成5年4月7日付、長野県飯田市大通2丁目208番地 信南交通株式会社 取締役社長 中島清より、飯田市北方に販店舗を建設するにあたり、「開発に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書」が飯田市教育委員会に提出された。当該地が埋蔵文化財包蔵地小垣外・辻垣外遺跡内にあたることから、平成5年4月19日に、長野県教育委員会の指導のもと開発側担当者と市教育委員会の間で保護協議を実施した。その結果、試掘調査を実施しその結果に基づいて、再度協議を行うこととなった。平成5年6月2・3日に飯田市教育委員会により試掘調査が実施された。重機により幅約2mのトレンチ4本を掘削したところ、平安時代の竪穴住居址・方形周溝墓等の遺構や遺物が確認され、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

### 2. 調査の経過

平成5年10月12・13日に重機による表土剥ぎを行ない、10月18日に作業員による現場作業を開始した。試掘調査の際に確認した方形周溝墓を中心に土坑群等を検出し、順次掘り下げを行なった。10月26日に航空測量・航空写真撮影を実施し、現場での作業員による発掘作業を終了し、引き続き個別写真撮影・測量等の補足を行ない、最終的に11月19日に現場での作業を終了した。

### 3. 調査組織

#### 1) 調査団

調査担当者 小林正春、馬場保之

調査員 佐々木嘉和、佐合英治（～平成5年度）、吉川 齊、山下誠一（平成6年度～）、吉川金利、渋谷恵美子（～平成5年度）、福澤好晃、下平博行、伊藤尚志（平成6年度～）

作業員 新井幸子、市瀬長年、岡田紀子、小沢信治、川上一子、北川 彰、北原久美子、木下 傳、沢柳藤夫、堀沢澄子、滝上正一、中平隆雄、西山あい子、福本静雄、福本まさ志、古林登志子、牧内 修、松沢美和子、松下直市、水落佳代子、溝上清見、吉沢二郎、依田時子

## 2) 指導

長野県教育委員会文化課

## 3) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節 (社会教育課長、～平成 5 年度)

横田 穗 (社会教育課長、平成 6 年度～)

原田吉樹 ( " 文化係長、～平成 5 年度)

小林正春 ( " 文化係・文化係長、平成 6 年度～)

吉川 豊 ( " " )

山下誠一 ( " " 、平成 6 年度～)

馬場保之 ( " " )

吉川金利 ( " " )

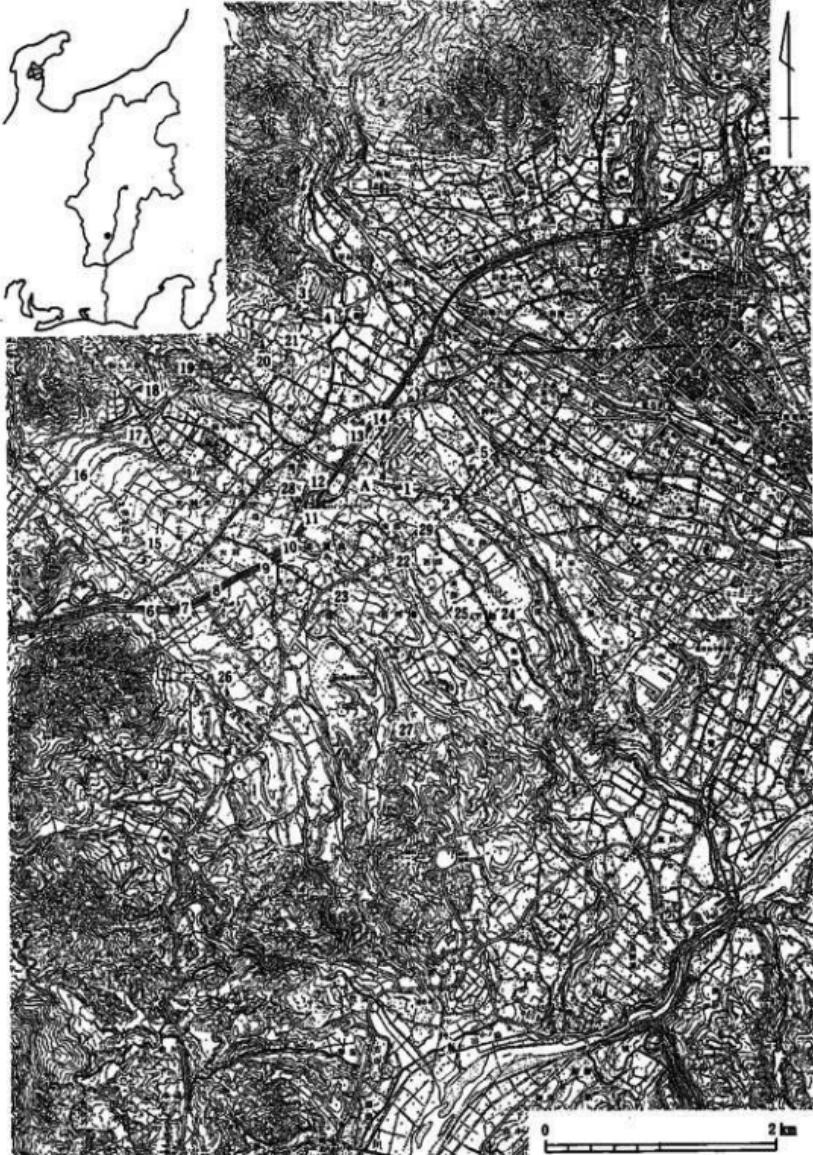
渋谷恵美子 ( " " 、～平成 5 年度)

福澤好晃 ( " " )

下平博行 ( " " )

伊藤尚志 ( " " 、平成 6 年度～)

岡田茂子 ( " 社会教育係)

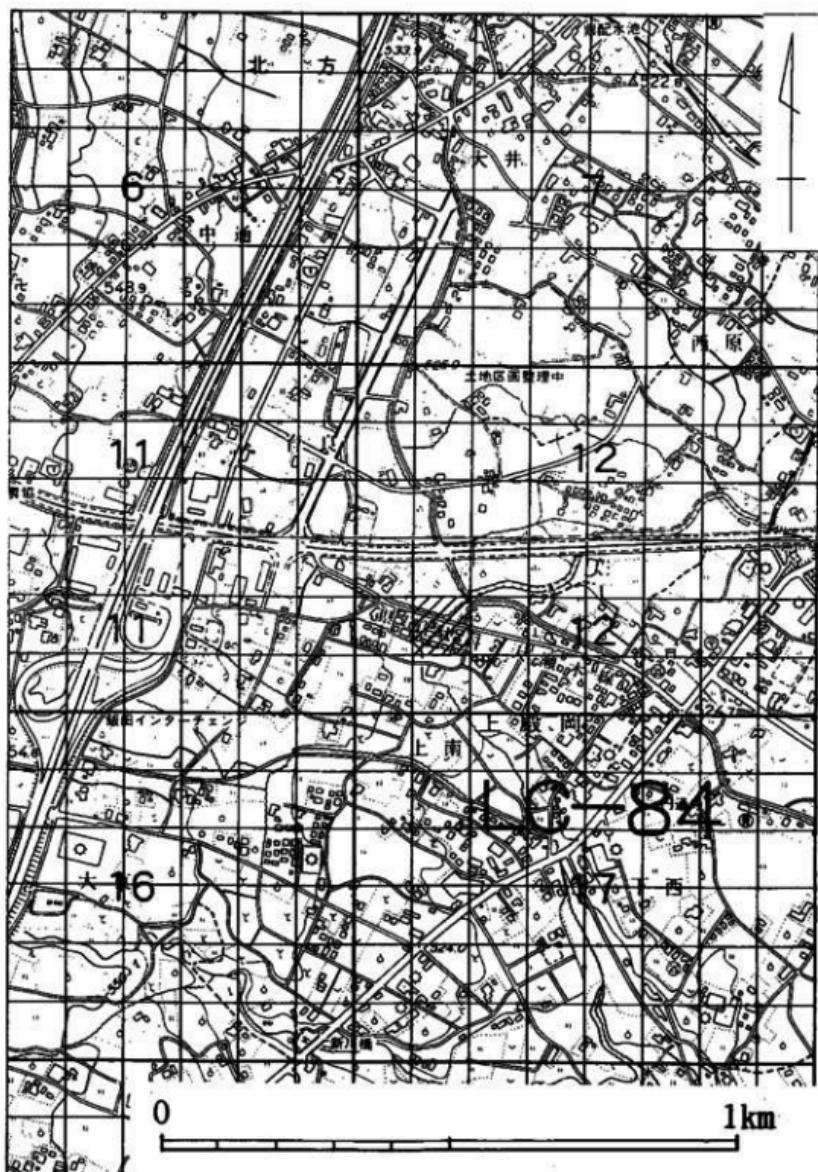


- A. 小垣外・辻垣外遺跡  
 4. 山口遺跡  
 8. 寺山遺跡  
 12. 滝沢井尻遺跡  
 16. 飯田垣外遺跡  
 20. 直刀原遺跡  
 24. 下原遺跡  
 28. 文吾林1・2号古墳
1. 八幡面遺跡  
 5. 西の原遺跡  
 9. 六反田遺跡  
 13. 三蓋瀬遺跡  
 17. 火振原遺跡  
 21. 大原遺跡  
 25. 公文所前遺跡  
 29. 市場屋敷古墳
2. 殿原遺跡  
 6. 与志原遺跡  
 10. 大東遺跡  
 14. 上の金谷遺跡  
 18. 梅ヶ久保遺跡  
 22. 中島平遺跡  
 26. 中村中平遺跡
3. 立野遺跡  
 7. 上の平東部遺跡  
 11. 酒麗前遺跡  
 15. 鳥麗平遺跡  
 19. 細田北遺跡  
 23. 宮ノ先遺跡  
 27. 土器洞窯跡

挿図1 小垣外・辻垣外遺跡及び周辺遺跡位置図



擇図2 調査地点及び周辺地図



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置

## II 遺跡の環境

### 1. 自然環境

伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三穂地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。みかけ上は天竜川による河岸段丘地形を成すが、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山(1271m)・高鳥屋山(1397m)東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山から流れ出する入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおむね北方地籍では新井付近・大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下巣岡地籍まで達するものもある。扇端付近では通例の如く湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、扇央付近でも比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果した小河川は現在は堆積作用により下谷作用に転じているが、浸透力は弱く、解析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

小垣外・辻垣外遺跡のある北方地籍は笠松山系から発達した扇状地の扇頂から扇央にかけて広がる。遺跡はその扇央付近にある飯田インターチェンジの北東側に位置し、飯田インターチェンジ東側の毛賀沢川と大井川の合流点に至る東西250~700m、南北350mの範囲にある。今回の調査地点は毛賀沢川と大井川の合流点西側にあたる。遺跡の北側は1.5~2mの比高差をもって一段低くなり、育良・西ノ原へと東に延びる段丘面となる。南側は2m前後の比高差をもって下新井沢川となり、滝沢川と合流して新川の支流アマズラ沢川となって浸透谷を形成して東流する。遺跡の中心部から東南東へと延びている舌状台地の先端部は一段低くなっている。下巣岡の段丘面となる。遺跡の東側では毛賀沢川の氾濫堆積がみられ、さらに東にある殿原遺跡ではこのあたりを生活基盤としていたと考えられる弥生時代後期の大集落が確認されている。

## 2. 歴史環境

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壺渕・上の金谷各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原・梅ヶ久保・細田北・大原・直刀原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・酒屋前・鳥居平・下原・高野・公文所前・中村中平等の各遺跡がある。こうした文化財に表われた先人達の足跡は縄文時代早期までさかのばる。立野遺跡や山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に下原遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一画が調査されている。また中村中平遺跡でも中・小規模の集落が確認されている。後期については、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で断片的ではあるが、遺構・遺物が確認されているほか、中村中平遺跡で明らかになった墓域・祭祀を含めた集落のあり方と後・晚期の豊富な資料は、これまで概期の資料が少なかっただけに、今後の研究に大きく貢献するものといえる。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。これまで調査された遺跡としては大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平・中村中平遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを超える高所から3軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。本遺跡の北側には、大名塚古墳が現存し、他に消滅したものとして中村狐塚古墳・寺畠古墳・宮原2号古墳がある。集落については、前期後半の上の金谷遺跡、後期の三壺渕・中島平・中村中平遺跡が調査されている。調査例は少ないが、中村中平遺跡では茂都計川の氾濫原と湿地帯を生産基盤とした概期の大規模集落の存在が考えられる。地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定することができよう。

奈良時代については、中村中平遺跡で掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路および「育良駅」の推定地や、莊園を構成する村落の起源

等に関連すると思われる箇所があり、重要な役割を果たした地区ということができる。

平安時代については、その末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。そのなかには中村・久米・川路・殿岡が含まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたことが考えられる。当地区における大規模な井水開発の歴史はこの時代にはじまるともいわれている。殿原遺跡の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井戸・小垣外・三塗潤・上の金谷・宮ノ先・公文所前遺跡等地区内のほぼ全域にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区の開発が一段と進んだ証左であろう。隣接する山本久米地区には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六年」(1140年)の銘を持つ薬師如来坐像があることから、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいちはやく中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。また、この時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窟跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達がみられる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを繼いだ。その地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。

北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

以上のような、当地区的歴史の流れをふまえて、次章から今回の発掘調査成果を述べて、歴史構築の一助としたい。

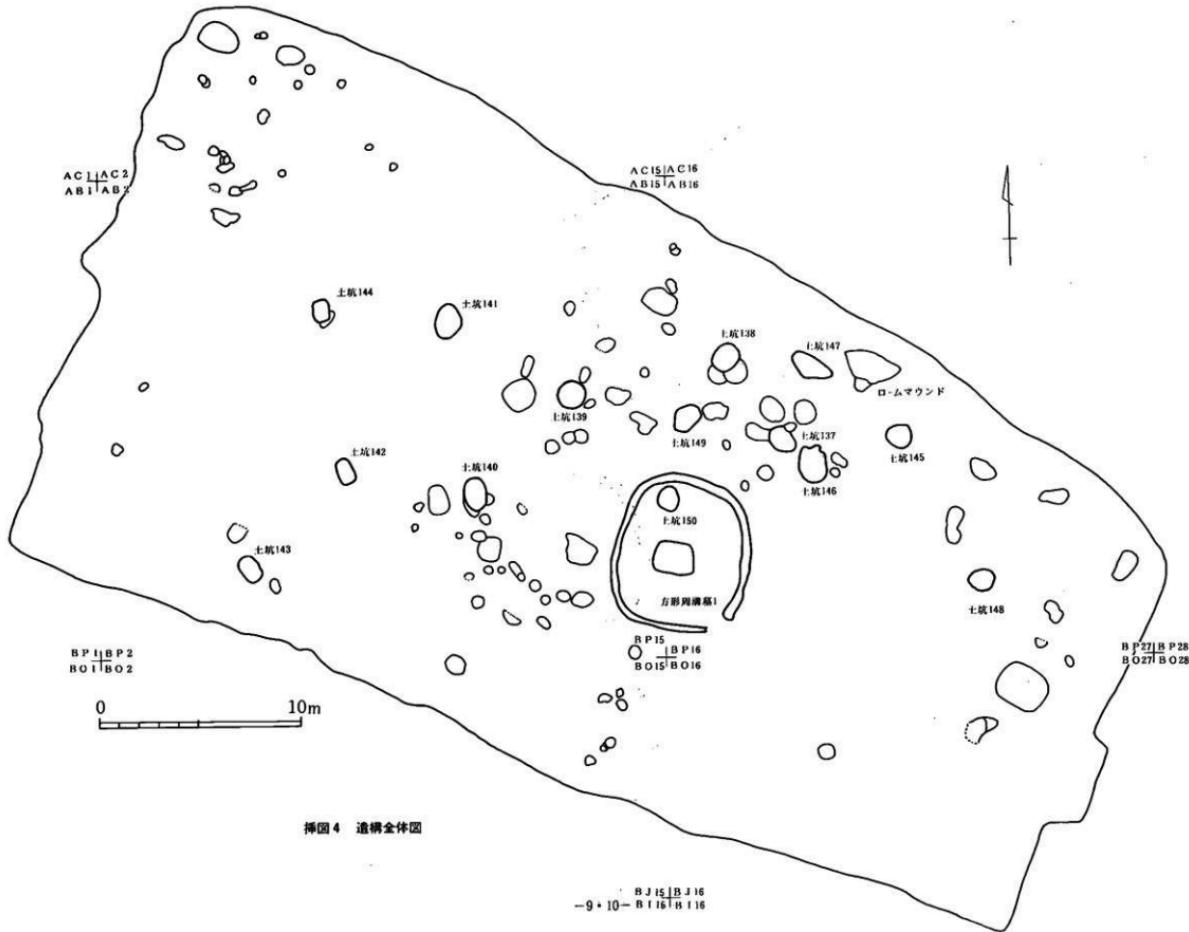


插图4 造構全体図

### III 調査結果

#### 1. 穫穴住居址（挿図5、第1図）

##### ①31号住居址

本住居址は、試掘調査の際に敷地内の北側で確認された。今回の発掘調査区域外になる。この部分は店舗建設の際には駐車場になるため、地下の遺構には影響がないと判断し本調査は行なわなかった。そのため、規模等については正確に確認しておらず、以下試掘調査時の所見を述べる。

隅丸方形の竪穴住居址の範囲内には焼土・炭火がみられ、この住居址は火災にあったと思われる。これとともに土師器・須恵器壺等が出土している。1は、ロクロ成形による底部回転糸切りの土師器壺である。内側に黒漆の付着がみられる。2は、底部回転糸切りの須恵器壺である。3は、隻片である。



挿図5 31号住居址位置略図

#### 2. 方形周溝墓（挿図6・7）

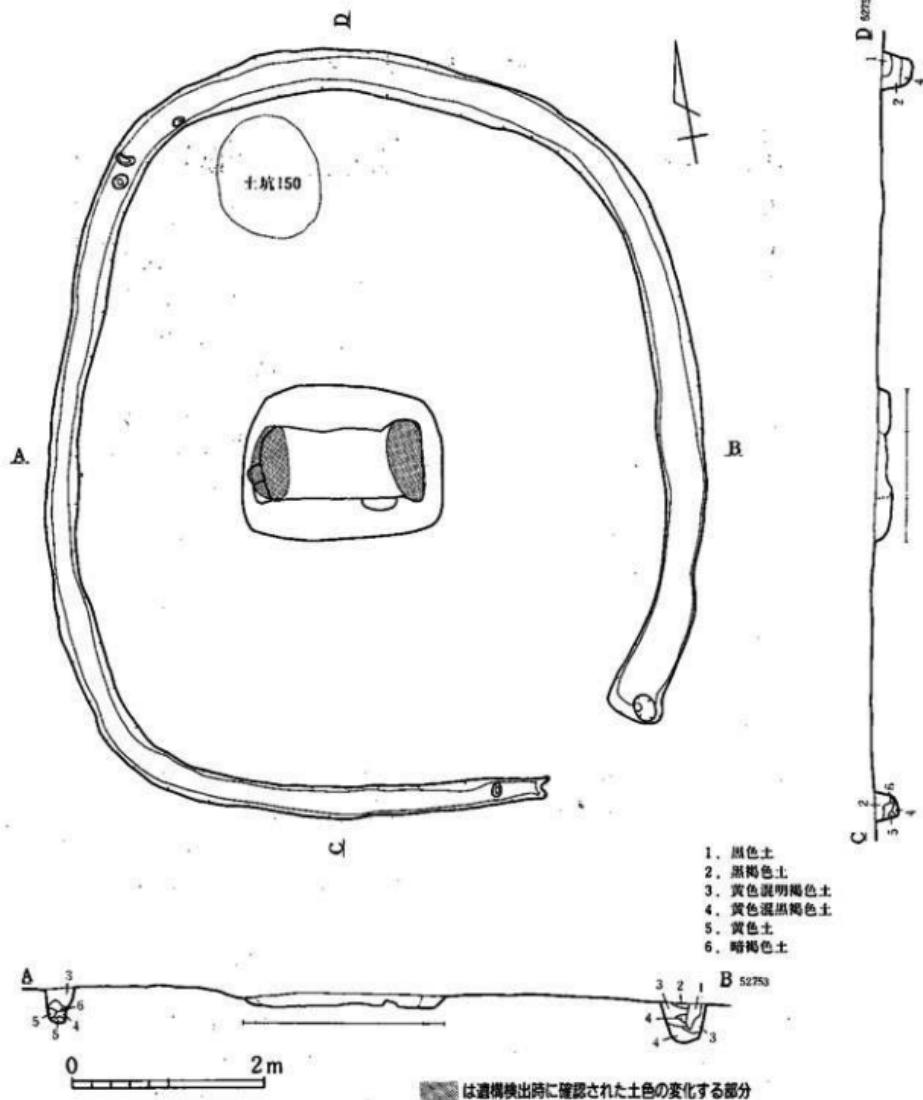
方形周溝墓は、幅1mほどの方形の周溝を掘らすものが通常であるが、まれに比較的細い溝を掘らし、方形というよりもむしろ円形に近いような不成形を呈するものが見られる。こうしたものは例が少なく、時期的にどこに位置するのか明確にされてはいない。今回確認されたものも時期を確定する資料に乏しいが、今後こうした墓のありかたを考える上での一資料となるといえよう。

##### ①方形周溝墓1

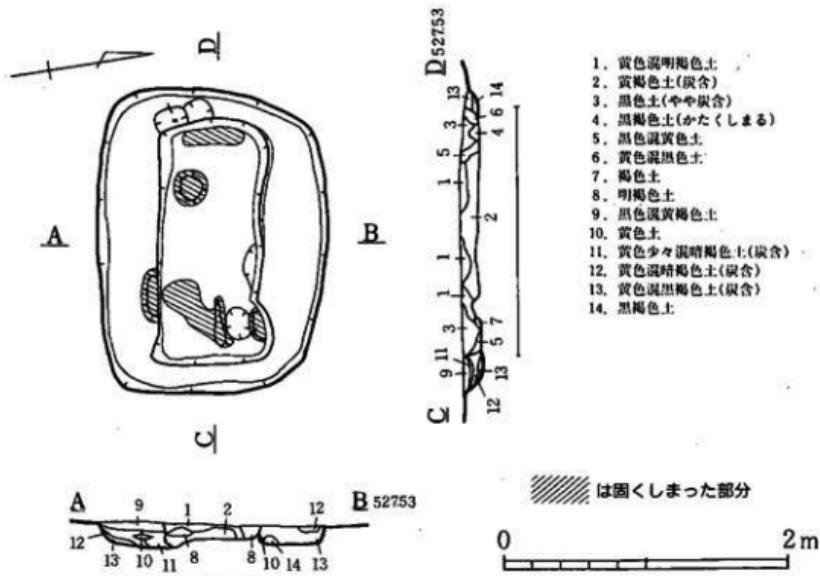
上部はかなり削平されていたが、ローム層面を掘り込んだ周溝と埋葬施設を確認した。

周溝を含めた規模は6.85×7.85m、周溝内側で6.05×7.15m、隅丸のやや不整形の長方形を呈する。周溝の深さは0.25~0.35m、断面はU字形を呈し、底部は平坦ではなく若干の凹凸がある。周溝幅は0.22~0.5m、南東隅にある陸橋北側の周溝の幅が最も広く、端部には周溝とともに掘り込まれたと思われる柱穴状のピットがある。

埋葬施設は、周溝内側のほぼ中央に確認された。主軸方向はN80°W。2.1×1.6mの隅丸長方



插図 6 方形周溝墓 1



挿図7 方形周溝墓1埋葬施設

形の墓壙を掘り、その中央に $1.7 \times 0.75\text{m}$ の遺骸を埋葬する主体部がある。上部のほとんどが削平されているため、墓壙の最も深いところで $0.18\text{m}$ 、主体部底面は $0.12\text{m}$ ほどであった。遺構検出の際には、埋葬施設を明確に確認することができたが、埋葬施設の底部のしまりは悪く、覆土とローム層との土層の変化からかろうじて底面を確認した。

主体部もやや不整形な隅丸長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。墓壙をさらに掘り込んで主体部が設けられるのが通常であるが、本例は主体部の底面は墓壙のレベルとほぼ等しいか、北西部分ではむしろ高くなっている。底面にはほとんどしまりはないが、底面より高い位置で部分的に固いところがある。主体部の構造との関係は不明である。遺構検出時には、主体部の両側で土色の変化が確認されたが、掘り下げた結果では、底面はほぼ平坦で、小口板を立てるための掘り込みは確認できなかった。しかし、その部分で主体部の幅が広くなっていること、底面が固くなっている部分があることから、小口相当施設があった可能性もあるが、棺構造は把握できなかった。

出土遺物は、縄文土器片のみで副葬品と考えられるものは主体部からは検出できなかった。

以上、埋葬施設及び周溝内からは縄文時代の土器片がみつかったほかは遺物はない。これらの遺物は遺構が埋没する際の混入と考えられ、周溝墓の時期決定する決め手はない。

### 3. 土坑（挿図8～10、第1図）

14基の土坑が確認された。土坑からも遺物はほとんどないが、形態的な類似によりグループ分けが可能である。

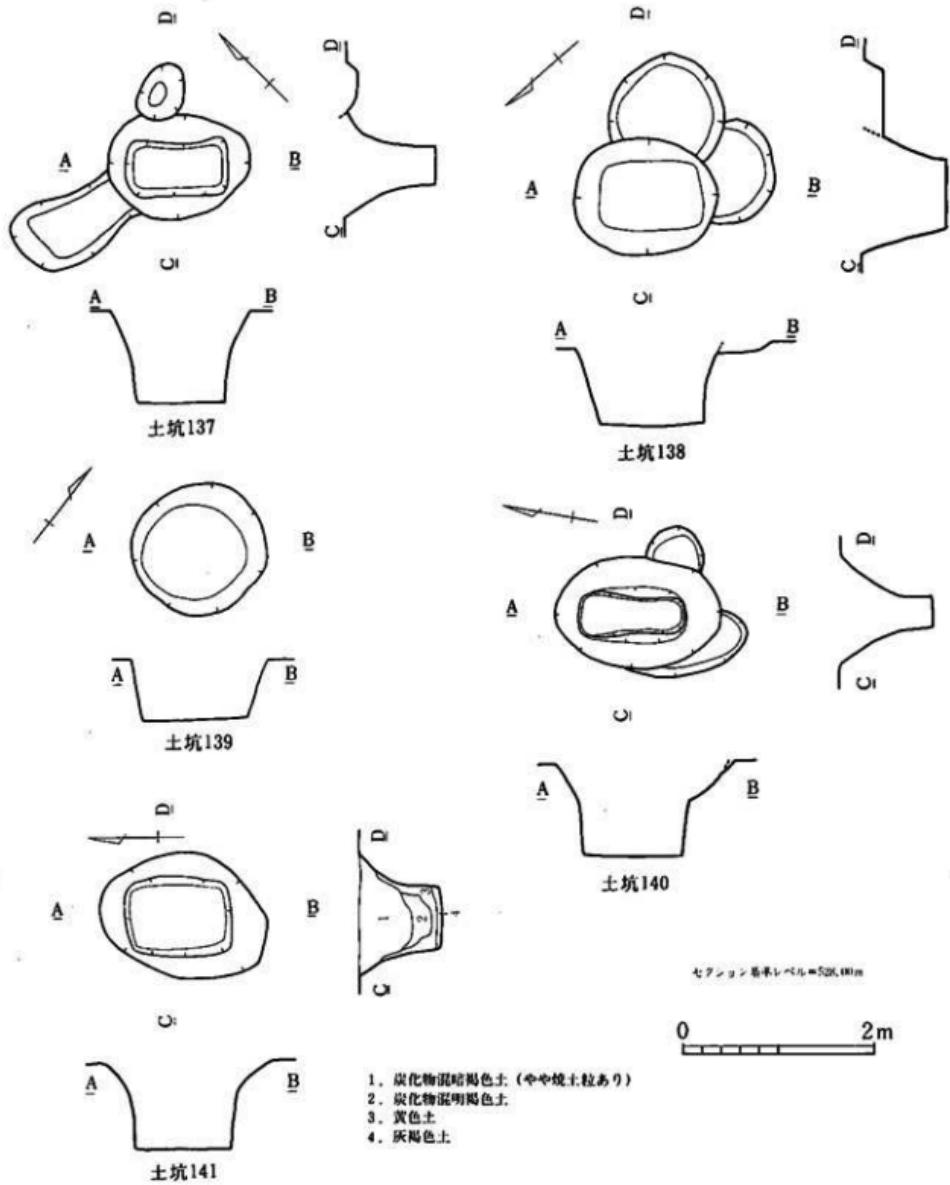
土坑番号	規模(m)	底 部(m)	深さ(m)	長軸方向	出 土 遺 物
137	1.2×0.45	0.92×0.4~0.42	0.95	N45° W	縄文土器片・打製石斧
138	1.2×0.8	1.06×0.7	0.8~0.85	N40° E	
139	1.4	1.1×1.0	0.6~0.65	—	
140	1.3×0.5	1.04×0.32~0.4	0.95	N10° W	
141	1.1×0.65	1.0×0.66	0.9~0.95	N3° W	
142	1.2×0.5	0.82×0.28~0.36	0.7~0.75	N15° W	
143	1.15×0.5	0.94×0.44~0.46	0.7~0.8	N36° W	縄文土器片
144	0.95×0.6	1.0×0.6	0.5	N11° W	
145	0.6×0.5	0.78×0.64	0.85~0.9	N80° W	打製石斧
146	(1.4)×1.3	1.08×0.78~0.9	0.8	N35° W	
147	2.2×1.06	1.3×0.5	0.7	N62° W	
148	0.7×0.5	0.56×0.48	0.85~0.9	N5° E	
149	0.75×0.9	0.8×0.44~0.5	0.8~0.85	N35° E	
150	1.25×1.1	1.06×0.52~0.54	1.05~1.1	N22° W	

〔1型〕 土坑 137、140、141、142、143、144、146、149、150

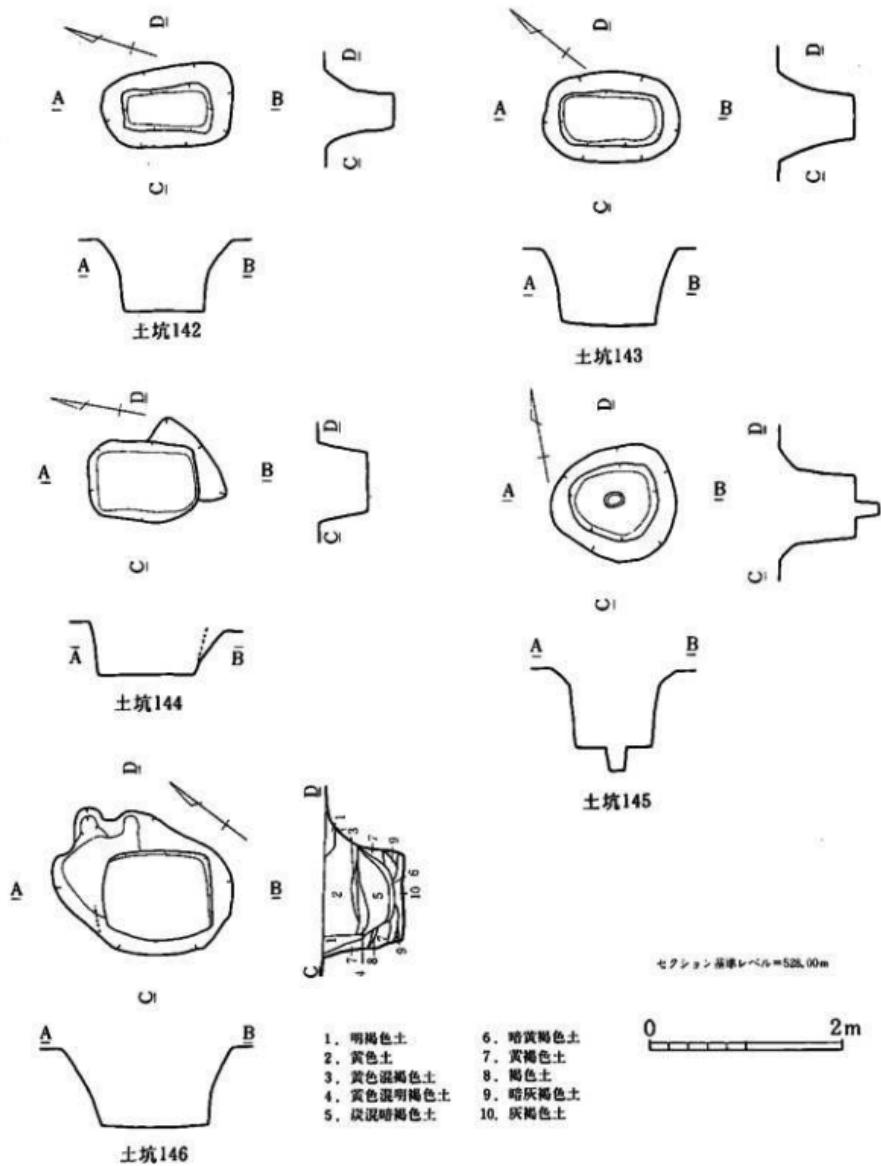
遺構検出面での掘り込みは梢円形であるが、土坑本来の形態は長方形を呈する。やや中央部がくびれる細長い長方形のもの、逆に中央が張り出すものなど、形態に若干バラエティはある。長方形土坑の底部は堅く平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。また、この型の土坑の覆土堆積状況をみると、いずれも底部に厚さ0.5m程度の灰褐色土の層がみられ、その上に順次レンズ状に堆積するという点が共通している。底面に何かがあったのか、上部施設の落ち込みによるものかは不明である。これらの土坑は比較的近い時期に、同じ目的をもってつくられた可能性が高い。

なお、土坑146、149では、覆土の最終段階で黄色土が堆積するという状況が類似しており、遺構検出面ではロームマウンド状にみえる。土坑142では、覆土上部に焼土が確認されたが、土坑との関係は不明である。

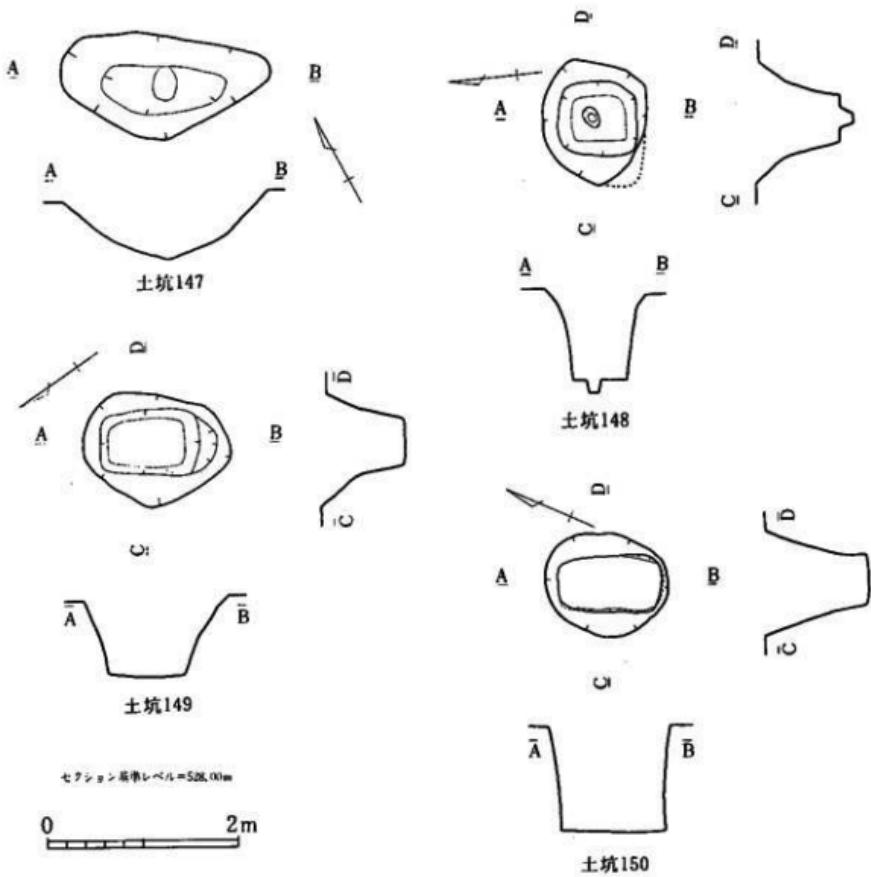
時期については土坑137より縄文土器片（第1図4）、打製石斧（同5）が土坑143より縄文土器片が出土したのみで、確定はできない。



插図8 土坑137~141



挿図9 土坑142~146



挿図10 土坑147~150

【2型】 土坑138

造構造面では椭円形であるが、土坑本来の形態はほとんど方形に近い長方形を呈する。土坑底部は堅く平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。形態的には1型と類似しているが、底部の灰褐色土の層はみられない。

遺物なく、時期不明。

【3型】 土坑139

円形の土坑。土坑底部は堅く平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。覆土上部に焼土が集中する部分が確認されたが、土坑との関係は不明。

遺物なく、時期不明。

〔4型〕 土坑145、148

遺構検出面では不整楕円形であるが、土坑148では本来の形態はやや隅丸の方形を呈する。堅く平坦な底部中央には直径0.1m程の楕円形の掘り込みがある。壁面は垂直に立ち上がる。その形態的特徴から底部中央に木を立てた、獲物を捕るための落とし穴の可能性が高い。

土坑145より打製石斧（第1図6）が出土したのみで、時期は不明。

〔5型〕 土坑147

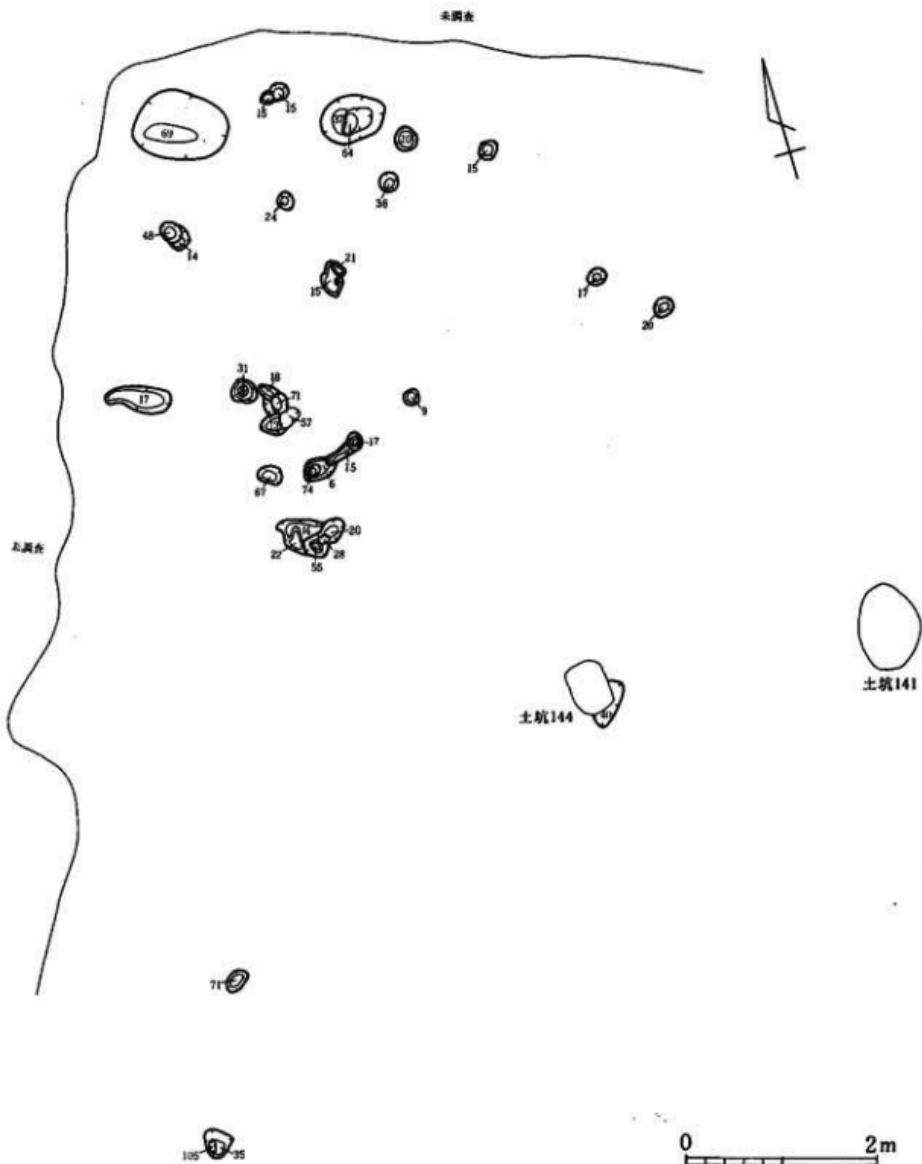
三角形の土坑で、底部はすり鉢状になる。ロームマウンドの可能性がある。

#### 4. その他の遺構（挿図11～14）

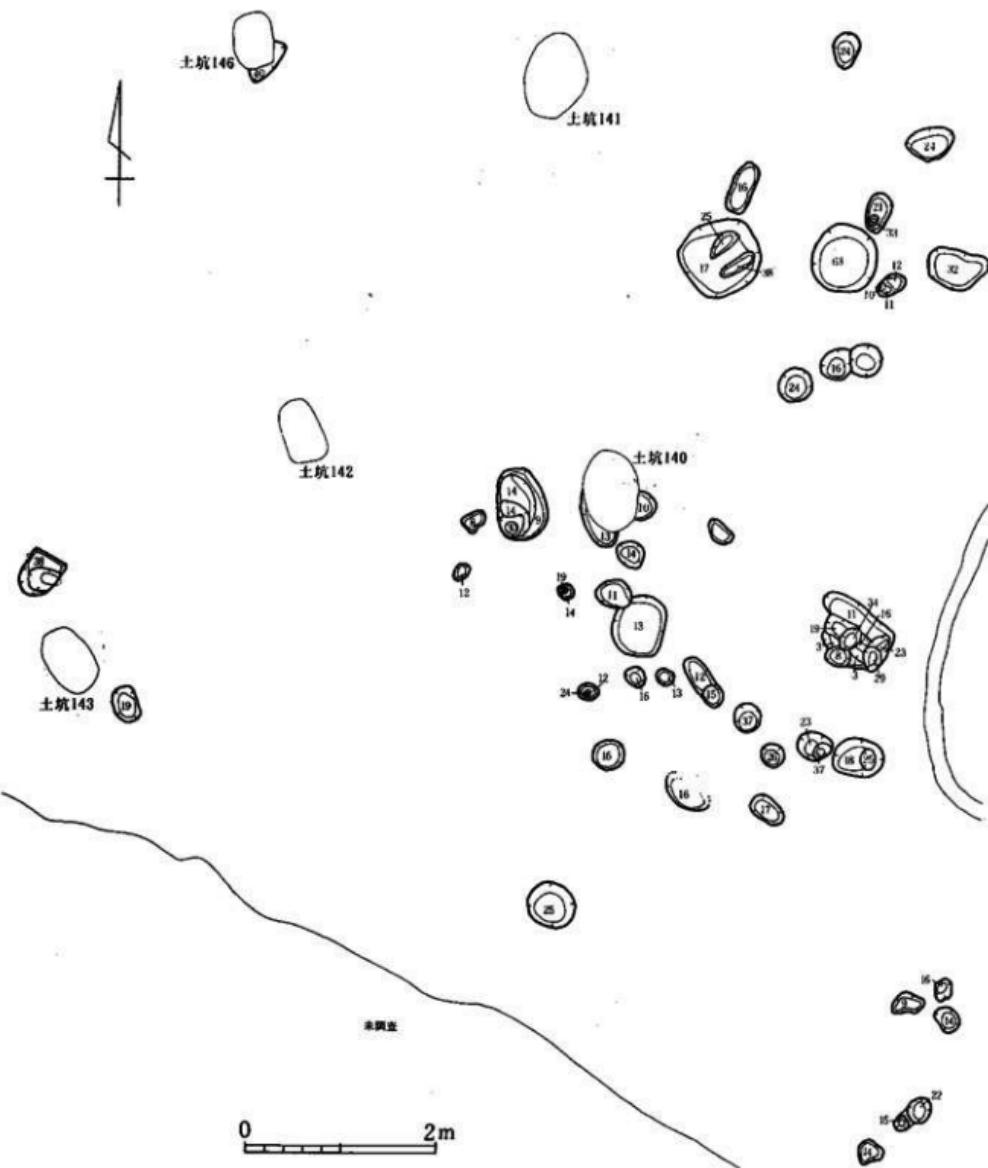
土坑等の周辺には多くのピット群が確認されたが、それぞれ規則性はなく、遺物も縄文土器小破片・黒曜石片をわずかに出土するにすぎない。

#### 5. 遺構外出土遺物（第1図）

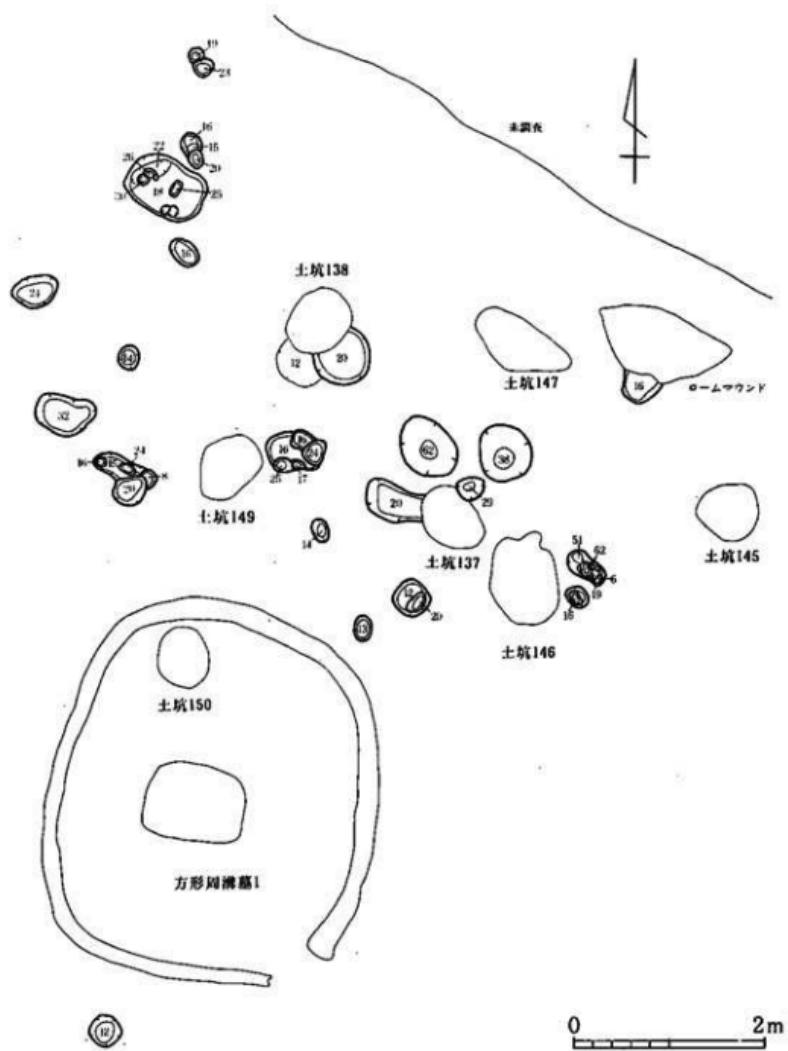
遺構外からは、縄文土器片（第1図7・8）、黒曜石片が出土しているが、いずれも小破片である。9は、底部回転糸切りの土師器壊の底部破片である。内面に黒色処理がされている。



插図11 ピット群(1)



挿図12 ピット群(2)



挿図13 ビット群(3)



挿図14 ピット群(4)

## IV まとめ

昭和47年の中央自動車道建設及び昭和60年的一般国道153号飯田バイパス建設に先立つ発掘調査で、縄文時代から平安時代の竪穴住居址30軒、土坑136基等が確認されている。これまでの遺構分布からみると、集落の中心は今回の調査地点の西側の扇状地中央部に位置する飯田インターチェンジ付近にあると思われる。

方形周溝墓は本遺跡内では初めての発見であり、居住域と墓域という集落内における空間利用を考える上で興味深いが、周囲の土坑とともに遺物が極めて少ないとから、遺構の時期決定等に問題がある。これまでの周辺地域の状況もふまえて、今回の調査の要点をいくつか述べてまとめとしたい。

### 1. 方形周溝墓

飯田下伊那地方でこれまで確認されている方形（円形）周溝墓は100基を越える。弥生時代後期に盛行した墓制であるとともに、これまでの調査で古墳時代（5世紀前半）まで築造される地域があることもわかつた。飯田市開八幡原遺跡では周溝を共有しつつ4世紀から5世紀前半まで順次築造がされていた。方形周溝墓は周溝を共有しつつ、連続的に宮まれる場合と1つ1つは単独でいくつかがまとまって存在する場合とがあるが、後者の方が多いようである。ただ、墓域全体を調査した例はほとんどなく、調査されていても主体部が残っていないかたり、あっても周溝内を含めて出土遺物が少ない場合が多い。本遺跡の例も主体部が確認されたにもかかわらず、副葬品が皆無という状況であり、これまでに知られている方形周溝墓との比較は難しい。

本遺跡の例は、周溝を共有せず単独で1基が確認されたが、遺跡内での他の発見例がなく群としてのあり方は不明である。形は方形というよりも円形に近い中間形態を呈し、周溝の幅は狭い。これまでに確認されている方形周溝墓の形は、正方形に近いものから長方形に近いものまで、四隅の明確な方形を呈するものが多い。規模は5m～10mを越すものまで大小あるが、幅は1m前後のかなりしっかりとした周溝が廻らされる。こうした中でみると、本遺跡例はやや異質な感じを受ける。恒川遺跡群（恒川B地籍）の方形周溝墓1が本例と形態的に類似しているが、どちらも時期決定となる遺物の出土がないことから、安易に比較することは避けなければならないだろう。

また、今回の調査では盛土の存否は確認できなかったが、埋葬施設の残存状況から、旧地表面から削除されたとして、若干の盛土がなされていたことが推定される。

さらに周辺に目を向けると、毛賀沢川を挟んだ対岸の殿原遺跡で円形・方形周溝墓が1基づつ

確認されているが、位置的にみてもこれとの関連は考えにくい。殿原遺跡は弥生後期の大集落であるが、これに対し本遺跡内での同時期の集落の存在は不明である。西側の中央自動車道付近に縄文時代から中世に至る集落が確認されているが、これとの直接的なつながりも見いだし難い。いずれにしても円形・方形という形の問題、時期と立地の問題を含めて、方形周溝墓のあり方を考えいく必要がある。調査地点の南側に接する南沢川（毛賀沢川）は、遺跡の東側でこの川の氾濫堆積がみられることから、現在とは流路が異なっていたことは十分に考えられる。これまで調査がされていない川を挟んだ対岸の一帯との関係も今後考える必要があろう。

## 2. 土坑

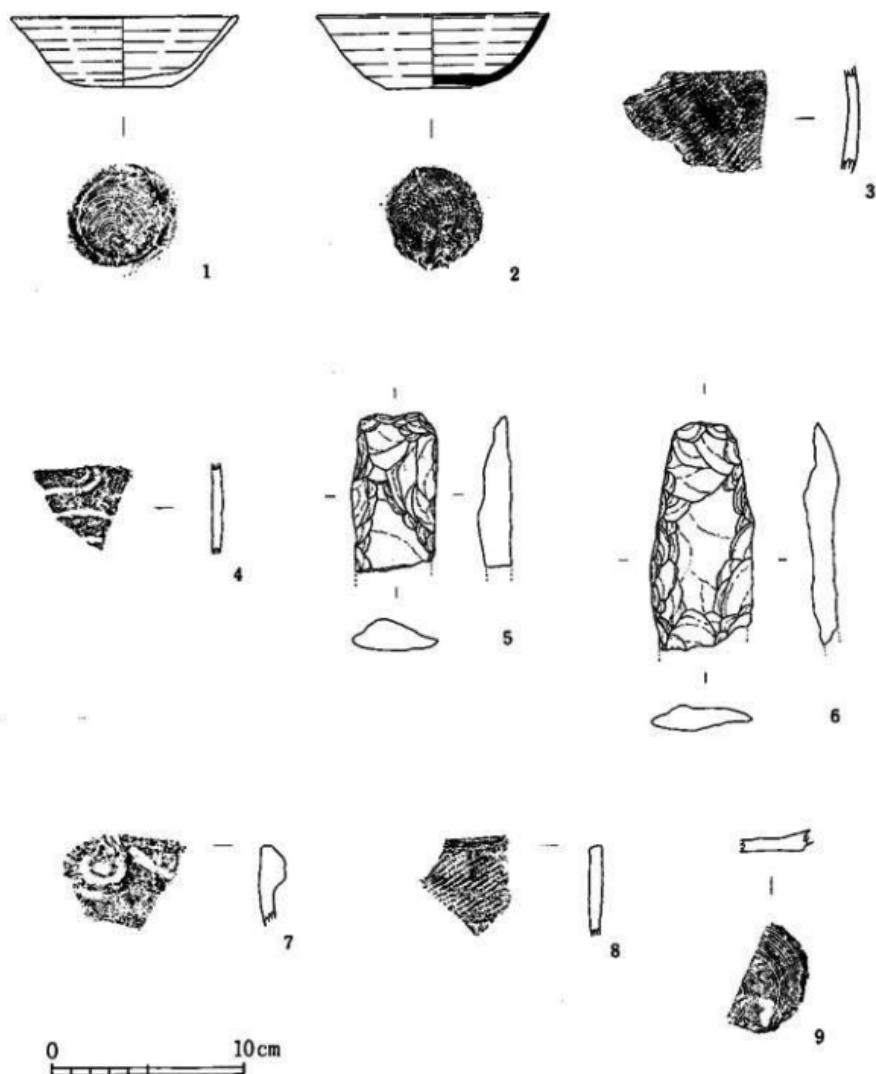
方形周溝墓を取り巻くように確認された長方形で壁が垂直に立ち上がる土坑群の存在であるが、これも方形周溝墓と同様遺物がほとんどなく、時期・性格がわからない。いずれも意図的に掘られたものであると考えられるが、土坑145、148が落とし穴である可能性を除いては、明確でない。周辺の他の土坑も形は異なるが落とし穴であるのか、方形周溝墓とともに墓を想定するかは難しい。土坑150が方形周溝墓の周溝の内側に掘られていることを考えると周溝墓と土坑とは一定の時期差が存在したといえる。覆土の土壤分析を行なう必要があったかもしれない。いずれにせよ、周辺集落の状況もわからないため、今後の周辺地域の調査に期待したい。

## 3. 平安時代の堅穴住居址

今回の調査で唯一まとまった遺物としては、調査区域外の北側部分で確認された平安時代の堅穴住居址から出土した土師器と須恵器がある。概期における本遺跡の状況をみると中央自動車道付近及び本遺跡北側のバイパス建設の際の調査で分散的に数軒の住居址が確認されているにすぎないが、その中には墨書き土器や綠釉陶器を出土したものがある。本遺跡以外にも中央自動車道建設の際の一連の調査で概期の住居が確認されていることから、この一帯における拠点的集落の存在を推定することはできよう。ただ、伊賀良地区内に推定されている東山道の「育良駅」の場所については今だ明らかではなく、これとの直接的な関係を指摘することはできない。

前述のとおり、今回の調査は断片的なものではあったが、今回の調査地点の位置付けは周辺の遺跡の調査により、さらに明らかにされるといえよう。

# 図 版



第1図 31号住居址、土坑137・145、造構外出土遺物  
(1~3 31住、4・5 土坑137、6 土坑145、7~9 造構外)

卷之二

# 写 真 図 版

調査区全景

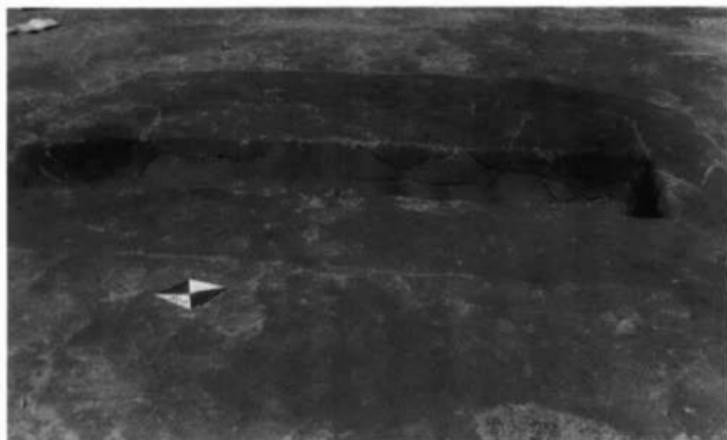




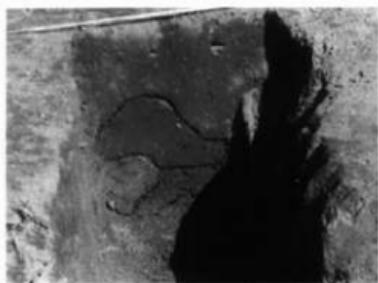
方形周溝墓 1 (南から)



同 主体部 (東から)



方形周溝墓 1 主体部東西セクション



同 周溝西側セクション



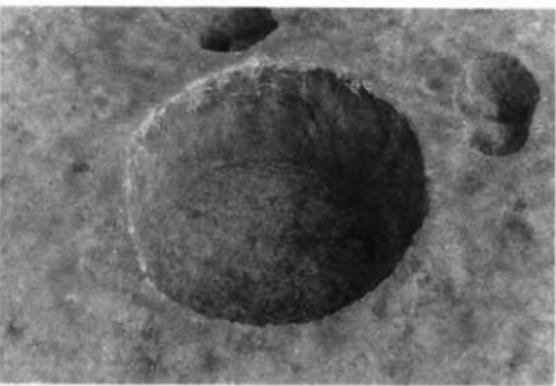
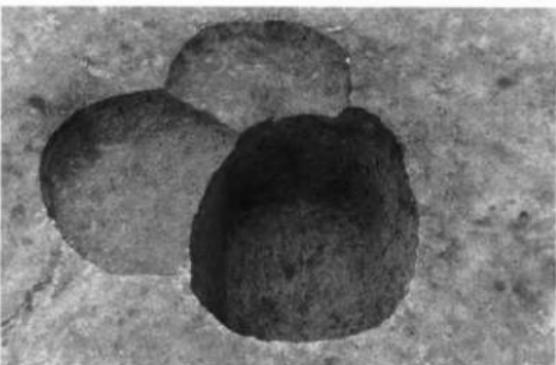
同 周溝東側セクション



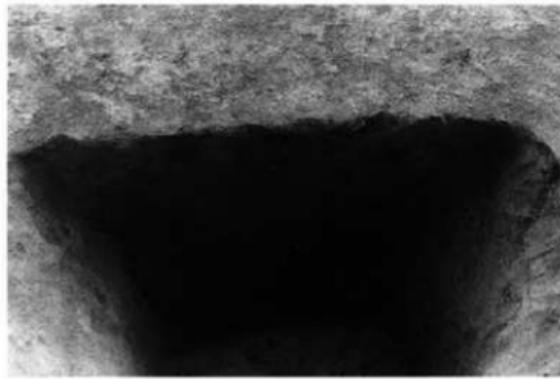
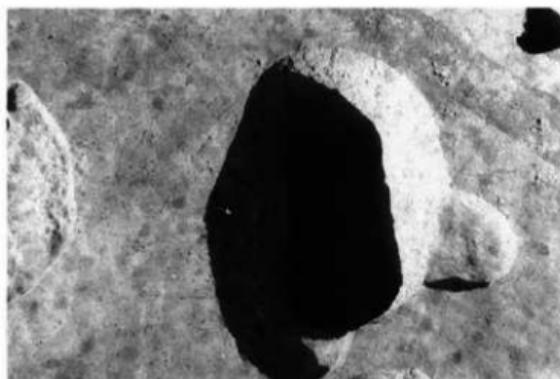
同 周溝北側セクション

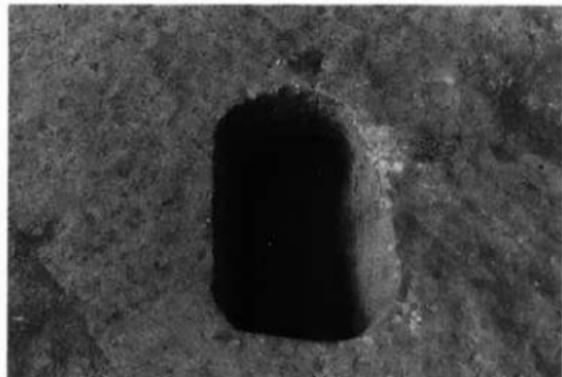


同 周溝南側セクション



図版 5

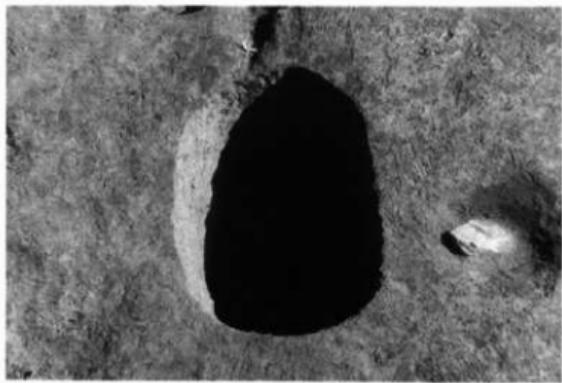




土坑142



同 南北セクション

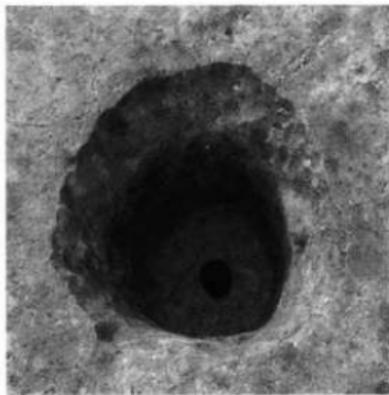


土坑143

図版7



土坑144



土坑145



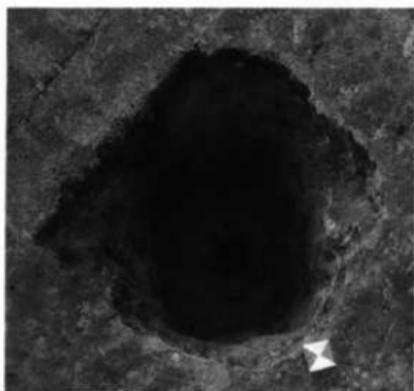
土坑146



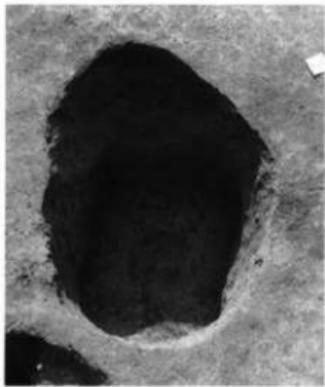
同 東西セクション



土坑147



土坑148



土坑149

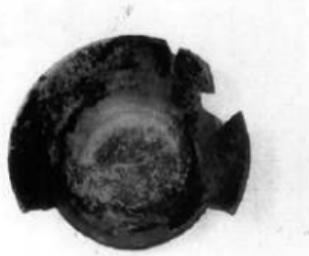


土坑150

图版 9

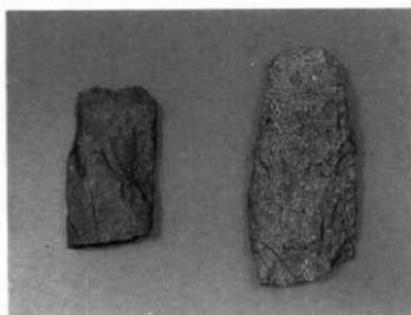


31号住居址出土須惠器坏

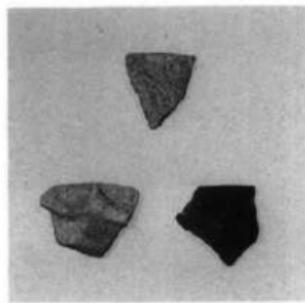


31号住居址出土土師器坏

31号住居址出土土師器壞



土坑137·145出土打製石斧



土坑137·遺構外出土繩文土器



遺構外出土土師器坏



発掘調査風景



造構実測



航空写真撮影



## 報告書抄録

フリガナ	こがいと・つじがいといせき
書名	小垣外・辻垣外遺跡
副書名	貸店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	渋谷恵美子
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145 TEL0265-53-4545
発行年月日	西暦1995年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こがいと・つじがいと 小垣外・辻垣外	いいだしきたがた 飯田市北方	2053		35° 29' 50"	137° 47' 95"	平成4年 10月12日 ~ 11月19日	800m <sup>2</sup>	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小垣外・辻垣外	墓ほか		方形周溝墓 1基 土坑 14基		・墓域と居住域の関係

賃店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

小垣外・辻垣外遺跡

1995年3月 印刷・発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145

飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社

